

三一新書 374

色彩作

邦 光 史 郎 著



邦 光 史 郎
くに みつ し ろう

1922年 東京に生まれる
高輪学園出身
戦時中「新作家」同人，戦後「文学地帯」社を主宰，
十五日会に属し「文学者」同人，「京都文学」同人
を経る
著 書 『欲望の媒体』（三一書房）『社外極秘』（三一書房）
現住所 京都市左京区浄土寺西田町100

色 彩 作 戦

定価 250円

1963年 3 月 23 日 第 1 版発行

1963年 5 月 23 日 第 2 刷発行

著 者 © 邦 光 史 郎
1963 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 株 式 会 社 三 陽 社

製 本 所 永 井 製 本 所

発行所 株 式 会 社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 東 京 (201) 9 5 8 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 374

編集担当 寺村嘉夫

色 彩 作 戰

邦 光 史 郎

三 一 書 房

色彩作戰 目次

第一章	計 画	5
第二章	女の城	28
第三章	滯 標	48
第四章	夜の電車	80
第五章	花小金井	105
第六章	色彩情報	125
第七章	自白注射	151
第八章	妨害作戦	171
第九章	夜の真珠	195
第十章	犯罪の海	225

第一章 計画

1

その日は風が強かった。白く砂埃をまき上げて、風は西の大阪湾から東の丘陵地にそそり立つ大阪城へと吹きつづつた。

大阪の中心街では、江戸時代から、大阪城へ向う東西の道を通りまたは町と呼び、その反対である南北の道を筋すぢと称している。御堂筋みどうすぢ、堺筋さかいすぢが南北に貫ぬく街路であり、土佐堀通り、新町通りなどが東西に走る大通りであるのは、このためなのだ。

だから西から吹く風は、大通りを煽って、御堂筋や堺

筋と交錯する地点で、小さな旋風つむじかぜを舞わせていた。

それは、中瀬慎一の着ている半袖開襟シャツの胸を、はち切れそうにふくらませたかと思うと、たちまちしぼませてしまったりした。

砂塵を避けて、細めた睫毛のあいだから、彼は長堀橋の交差点を睨んでいた。

長身で、肉づきは細っそりと緊っていた。それだけに、二十九歳というまだ敏捷な肉体は、バネのような弾みをもっていた。顔も余分なものを削り取ったようにやせていた。濃い眉毛と剃りあとの蒼さの目立つ頬と顎であった。唇はいつも堅くひきしめていた。眼だけが、冷えた怒りを底に含んでいるようにたえず光っていた。自己よりほかのどんな存在をも愛すまいとする拒否の姿勢が、そうした全身からにじみ出して、彼は孤独な男であった。車が、末吉橋通りの方からくるか、それとも堺筋を南行してくるか、それが分らなかった。

そこまで詳しくはキャッチできなかったのだ。けれど、予定の時間には、もうなっていた。

黒いプリンスに乗って専務高石光男が、この地点を通

過することだけは確實なのだ。

彼は、わずかに眼を落して、腕時計をみた。一時ジャスト。約束の時間が来た。

彼の耳のなかで、蛇の羽音のようにひびく男の低い声が、よみがえってきた。

「ほんなら、一時に、鰻谷中之町の店へきてくれはりまっか」

それを、物惜しみする姉のように、交換手が、聞かせてくれた。狭い電話交換室では彼女が女王であった。中瀬の指が、堅く糊づけられた制服の白い襟カラーから、大きく波うっている胸もとに近よると、その手の甲を、爪を伸した彼女の指先がつねった。

彼が、ブラジャーの上から、乳房をおおうと、交換手の赤い爪は、彼の掌を鋭く引っ掻いた。二筋の線が走り、血が、毛細管を破られてにじみ上ってきた。

その傷あとは、今でも、ひりひりと風にしみた。

掌とマッチ箱のあいだで囲って、彼は小さくゆれる火を煙草に吸い取った。

一瞬、空白になった監視の向うに、黒いプリンスが姿

を現わした。

けれど、プリンスは赤信号に行手を阻まれて停止した。ワゴンと八トントラックに挟まれているプリンスの行先を、彼は考えた。

左折するか、それともまっすぐこちらの方へ交差点を渡ってくるか。

だが、長堀橋のあたりから堺筋に左折して、鰻谷中之町へ行くには、もう一度、電車道を横切って右折しなくてはならない。

ところが、その附近は、たしか右折とUターンを禁じられているはずであった。

中瀬は、掌の内側に隠した煙草を強く一吸いすると、長堀川に沿って歩き出した。

そのあたりの川は埋め立てられ、やがて、そこには有料駐車場ができる予定で、さかんにコンクリートが流しこまれていた。

思ったとおり、プリンスは、一団の車群にまじって、彼の背後から西進してきた。

それは、かならず一筋目か二筋目の橋を渡って、島ノ

内へ入ってくる。そうしなければ目的地へ行くことができないのだ。

中瀬慎一は歩度をはやめた。

一筋目で曲ってくればよいが、二筋目まで先行されてしまうと、見失う恐れがある。

プリンスは、彼を追い抜いて、二筋目の橋へと走っていた。

煙草を捨てて、中瀬も走った。

風が、まともに煽りつけてきた。

砂埃りが眼と鼻と口にとびこんできた。

プリンスは橋袂の白い建物の蔭に走りこんでいった。

彼は、それでも、まだ、あきらめはしなかった。相手の店がどこなのか、その所在地は、盗聴できなかったけれど、鰻谷中之町であることは間違いない。その上、相手は金融業者なのだ。それは、交換手がこっそり教えてくれた。

一丸茂兵衛、どんな人か知らないけれど、いつでも即座に五億円の札束をそろえられる金貸しだそうよ、凄くない。彼女は、そういった。

中瀬は、最初に出会った四つ辻に立って、あたりを見渡した。

四階建の貸ビルや商店、事務所の立ち並んだ狭い街通りが、白い風の中につらなっていて、三輪トラックやミニ・カーが行き交っていた。

この島ノ内一帯は碁盤の目のように、きちんと区劃された街なのである。

だが、もうプリンスの姿はどこにも見当らない。

プリンスをつかまえさえすればと考えたことが甘かったのだ。中瀬は、血のにじむほど強く唇を噛みしめて、目を走らせた。

次の辻へ行ってみたが、結果は同じことであった。試みと企みは潰え去った。

風が、また、舞い下りてきて、彼を包んだ。

白っぽい午後の街の一隅に置かれた赤電話が、中瀬の眼にとまった。

決断はすぐついた。彼は、煙草屋の店頭にある赤電話の受話機をはずすと、十円玉をほうり込んだ。

メモしてあった番号を指先でたどった。

「もしもし、どちらはんでっか」

奇妙に華やいた女の声が語尾をはね上げてひびいてきた。

「お邪魔いたします。クイーン堂本舗の者ですが、実は、今、専務のお伴をして、お宅へ伺うことになっておりました所、一足おくれて参ったもので、道順が分らなくなりました。どう参ればよろしいのでしょうか？ 只今、鰻谷中之町の近くまできているのですが」

「へえ、そうでっか。そんなら、うちは、玉屋町筋と笠屋町筋の、ちょうど、中頃だすさかいに、長堀川から二つ目の通りをきてくれはったら、酒屋はんのお隣りですよって、じき分ります。今、お宅の専務さん、きやはったところでっせ。お呼びしまひょうか？」

「いえ、それには及びません。では、すぐ伺います」
受話機の底から、今にも専務の声が入ってくるのではないかと、中瀬は恐れた。

いまなら、まだ、何もなかったことにして、引返すことができる。

彼は、いこいに火をつけた。

けれど、今の女が専務に電話のことを告げたなら、専務は顔色を変えて驚くにちがいない。しかし、それが自分の仕業であることまでは分らないはずだ。

中瀬慎一は、半分ほど吸った煙草を捨てて歩き出した。教えられたとおり、酒屋の隣りに、磨き立てた格子戸の仕舞屋があつて、一丸とだけ記した小さな表札が掲げられてあつた。

彼は、その戸をあけた。細い露地に導かれて、奥まった玄関口にやってきた。

2

蘭草の青く匂うような畳の上に麻の夏座布団が敷かれていて、黒檀の座敷机の向う側に一丸茂兵衛が、猫を負った背中を丸めて、ちんまりと坐っていた。

全体に丸味を帯びた、とらえどころのない表情をしていた。太短かい指先で団扇の柄をもてあそんでいた。禿げ上った頭の中央に、一本ずつ揃えた薄い髪を、きれいにならべていて、ねむそうに垂れた臉と、ふくらんだ鼻翼と厚い墓口のような唇をしていた。

麻の単衣の胸許がはだけていて、長い胸毛が、女の乳房のようにもり上った胸のあいだに房々としげっていた。

「この頃やったら、市中銀行より、かえって相互銀行の方が、気前ええかもしれまへんな」

柔和な眼もとで、一丸茂兵衛は、高石を眺めた。

「ところが、それも、実は、粹いっぱい借りておりますもので」

ズボンの膝をそろえて正座している高石光男は、いく分前のめりになりそうな姿勢で、子供のようにかさの低い相手を見下しながら、一丸茂兵衛の背後に備えられた金庫に、注意を奪われた。

それは、磁力をもっている魔物であった。

見まいと思えば思うほど、視線が、そこへひきつけられてならなかった。

「そやけど化粧品屋はんはよろしおまんな。女をきれいにして金が儲るなんて、こんな結構な商売はおまへんで」

高石専務は、あいまいな笑顔を返した。

「なんせクリーム屋はんは、ナベとカマさえあったら

商売ができる。桑津町あたりへ行ってみなはれ、オヤジがドラム罐をスコップでかき廻して、嫁ハンが、そいつを瓶に詰めとりまんな。あれが一瓶百円百五十円とは、ポロい商売やおまへんか」

「しかし、一丸さん、全国に化粧品メーカーが八百社、大手だけで十五社、名の通ったメーカーだけでも百二十社という激しさですからね」

口を開けば開くほど、どうしても自分の無能を相手にさらけ出すような気持ちがして、高石専務は、胃の痛む不快感に責められた。

「そらそうと、あんさんも大分ええ体格をしてはりますけど、血圧の方は、なんぼほどおます？」

「さあ、しばらく量っておりませんが、百五十はないと思います。四十台でしょうね」

「さよか。長生きしようと思うたら、それ以上肥らんことだす。女はよろしいが、酒はあきまへんで。ところで、あんた、京都の八瀬へ行きはったことおまへんか。あすこのかま風呂、あら、脂肪を抜くのもってこいだんな。わしは、トルコ風呂は嫌いだすねん。あんな、さ

らし首みたいな恰好のわるいもん、まっ平らですワ」

およそ屈託のない声であった。茶のみ相手を前にしているように、一丸は、口をすぼめて、笑った。

「ところで、いかがでしょう、どうしても、三日以内に入用なのですが、御用立て頂けますでしょうか」

座敷机に胸をすりよせるようにして、高石専務は、熱っぽい眼を注いだ。

「三千万でしたな。まあ、他ならぬ浪花証券さんの御紹介ですさかい、考えさしてもらいまひよ。わしは、政治家や役人の紹介やったらビタ一文、金は出しまへんねん。あいつらに金貸したかて、子を産みまへんよってな」

「私の方は、決して御迷惑をおかけするようなことは致しません。何分クイーン堂本舗は創業六十年のノレンがございますので、これに傷をつけたら、会社はおしまいです」

一丸茂兵衛は、つるりと禿げ上った額を掌で拭って女のようにかん高く笑った。

「あんたなかなか色事師や、その手で女を口説かはり

まんねやろ」

「滅相な」

「ま、考えときまっさ」

「いつお返事を頂けますでしょうか」

「明日は半ドン、明後日の日曜日に、そうだな、八瀬のかま風呂へおいなはれ。その時まで、返事をきめときますさかい」

「しかし、それでは、もし御融通頂けません時に、口数がなくなってしまうのですがね」

「高石はん、ええ鳥はバタつかんというやおまへんか。それとも、よそで、心当りがおありでしたら、わしの方は一向にかましまへんで」

「いえ、私の方は、ただ、ひたすら、一丸さんお一人におすがり申すつもりでおりますので、よろしくお願いいたします」

高石専務は、額に浮いた脂汗を隠すようにして、腰を浮かせた。

「では、何分ともにおよろしく」

立上ると、一丸茂兵衛は高石専務の胸までしかない短

軀であつた。

「なあ高石はん、世間では、一丸の金庫にはいつでも何億という札束が唸って夜泣きしておると噂してるそうだけど、正直の話、遊んでる金はビタ一文おまへん。一億の金が一口動いたら、なんぼ子を産むか、それを考えたたら、恐いもんだっせ」

階段口で、高石専務の足がとまった。

「そやさかいに、コゲつくような相手の所へ、娘を嫁にはやれまへん。金ちゅう奴は女といっしょで、お尻の冷めたいもんやさかい、抱いて暖めてもらわんことには、子を産みまへんのや」

硬張った背中を、軽く一丸の手が前へ押しだした。

「危のうおまっせ、うちの階段は下りがきついさかいに」

「一丸さん、化粧品メーカーは、どこよりも信用が宝です。もし不渡りを出すようなことがあれば、会社は即座に潰れるものと、覚悟しております」

階段を下りながらふりかえった高石専務の眼は、一丸茂兵衛の笑顔と正対した。

「高石はん、こうみえても、わしは冒険好きの人間でしてな、良い材料さえあつたら、一丁とびついたるかという気になりまんねん。これが弁慶の泣き所だすワ」
一丸の生暖い息が、高石専務の顔に吹きつけられた。階段を下り切った所が応接間になっていた。

白いカバーをかけたソファと丸卓と籐椅子が置かれていて、ソファの隅から若い男が目礼を送ってよこした。

声にならない驚きが、専務の咽喉の奥で鳴った。

「あんたはん、どちらはんです？」

鋭く一丸茂兵衛が見咎めた。

スダレをかけた奥の方から、四十台の和服の女が走り出てきた。

「初めまして、私、高石専務の秘書でございます」

立上った中瀬慎一は、上半身を傾けてうやうやしく挨拶した。

疑うように、一丸は、専務をふり仰いだ。

中瀬の眼は冷えた微笑をたたえて、高石専務に向けられていた。

「君は、いつきたんだ？」

「は。先程からお待ち申しておりました」

専務は、一丸の問いに対して、否定も肯定もしなかった。

無言で、靴脱石に向った。

中瀬は、一丸の妻らしい女のさし出す靴すべりを、受取って、専務に渡した。

儀礼を交して、高石専務は、一丸茂兵衛と別れた。

露路を出ると、白い風が街通りを駆け抜けていた。

酒屋の店頭に立てられたノボリが、風にはためいて竹竿にまといついていた。

「なぜあんなことをしたのだね？」

夏服の上衣のポケットに左手をつっこみ、左肩をいかせて、専務は光る眼鏡を、中瀬に向けた。

「あなたの行動に興味があったからです」

それは、すでに専務取締役対社員という関係を離れた声であった。

「誰かに頼まれてやったのか」

「別に……」

「隠しても、そんなことはすぐ分ることだ。しかし、

僕は、役員の行動を探るような社員の存在を許してはおけん。たとえ、君にどんな紐がついていようと、断固たる処置を取るつもりだ」

彼らは、島ノ内の街通りを、心斎橋筋へ向っていた。

「専務、断っておきますが、僕は、頼まれてこんなことをした訳ではありません。それは、僕の前歴を思い出して頂ければ、すぐ分ることです」

「君はたしか……」

「販売部宣伝課促進係の中瀬慎一です。思い出されましたか、この八月に、中国、四国、九州地方の小売店廻りから、一年六ヵ月ぶりに、やっと、本社へ帰ってきた中瀬です」

彼らは、立止って、互いを見つめ合った。風が、二人の頭上で鳴っていた。

その風音に、中瀬は真冬の暗い海を想った。低く垂れた雲の下で、海は三角の波頭を立てて、海馬が一せいに何千頭となく押しよせてくるように、泡立ち荒れて岸壁に打ちよせてきた。そして、そのたびに、砕けた波は、岸壁をおどりこえて、海沿いの道を濡らし、しぶきが冷

めたく顔を叩いた。

「君のことは、聞いている」

高石専務は、脂肪の厚い顔を、中瀬の注目からそらすようにして、路傍の喫茶店のガラス窓を眺めた。

「一年六ヵ月の長期出張、しかも、不必要な小売店廻りを、なぜ命ぜられたか、それも御承知のはずです。むろん、出張命令を出したのは人事担当の三浦常務で、あなたではありませんでした」

「中瀬……君といったね。咽喉が乾いた。ジュースでも飲んで行こう」

彼らは、鉢植えの熱帯樹を扉口に飾った喫茶店の着色ガラス扉を押した。

3

「ところで、一体何の目的で、僕の行動を探ろうとしたのか、まず、それが知りたいね」

高石専務は、アイスコーヒーの氷片を、匙でかき廻しながら、中瀬の目をのぞきこむようにしていった。

「そりゃ専務、僕だってまだ社員の端しくれですから

ね、果して今月分の給料が正規の二十五日に支払われるかどうか、興味がありますよ」

不快気に専務の形のよい眉毛のあたりがしかめられた。

「そうか、君はやはり、会社の中で、組合を作ろうとしているんだな」

太田クイーン堂本舗は、四年ほど以前に、多額の負債による業務縮小から争議を引き起して一度倒産しかけた社歴をもっていた。それ以後、正式には、労働組合をもたない、従業員八百二十名の中企業であった。

「そいつは専務の思ひすごしですよ。昔はともかく、今では、連帯意識よりも、個人主義に徹していますからね、誰も彼も、現在の僕にとっては、すべて敵です。味方は一人もありませんよ、今の社内では」

中瀬慎一は、孤児だな俺は、と思った。

自嘲するような笑いの翳が、自分の片頬にひっそりと浮んでふっと消え去って行くのを、彼は意識した。

「信じられんね。無目的にあんなことをして、それが一体君にとって、なんの利益になるのかね」

英国煙草のロスマンズを専務は口にくわえたが、中瀬

は火をつけてやろうとはしなかった。

専務も、煙草をすすめはしない。

お互いのあいだに、ざらついた感情が、氷の川のように横たわっていた。

この男は、ひねくれた男なのだ。何しろ学生運動で大学を中退した札つきなのだ。そう考えているだろうことを、中瀬は、専務の沈黙の表情から読み取った。

「僕の履歴書をごらんになればすぐ分ることですが、京都の大学を追出されて以後、これは関西にいたんではとてもまともに就職できない。そう思って東京へ行きました。そして、当時はまだBクラスの広告代理店だった昭和堂にもぐりこみました。ところが、勤めて一年半ほどたった頃、丁度仕事分ってきて面白くなりかけた矢先に、公安調査庁の名刺をもった、親切な男が、昭和堂の人事部へやってきましてね、中瀬慎一の前歴を御存知ですかと、こういったものですよ。お蔭で、僕は危うくクビになる所でした。しかし、ひどく僕を可愛がってくれる部長がいらしてね、二三年大阪の空気を吸ってこい、そのうちに本社へ呼び戻してやるからと、大阪支社へと

ばされました。そんな訳で大阪へくるにはきましたよ、結局支社長にいじめられて、詰腹を切られましたよ」
中瀬はいこいの煙りを一息深く吸いこんで、大きく吐きだした。

「しかし、捨てる神あれば拾う神ありといいまして、さいわい、僕の学生時代の友人に太田前会長と遠縁になる男がいらしてね、そのコネで、東京仕込みの宣伝マンというふれ込みで、今の会社へ押し込んでもらったんです。その頃はまだ太田前会長の勢力が強かったもので、割合良い仕事を与えられました。ラジオテレビの番組を一人で担当して、各放送局や広告代理店を忙しくとび廻っていました。もっとも会社も現在ほど斜陽じゃない頃でしたから、元の昭和堂大阪支社の連中にも、あべこべにスポンサー風を吹かしたりして、ちょっとした復讐者気取りでいましたかね、そこへまた、大阪公安調査局の親切な男がやってきたから万事休すです」

高石専務は二本目のロスマンズを口にくわえた。

「これは、あとで知ったことですが、公安調査庁のリストは、二年たつと、一応消えるんだそうですね。とこ

ろが、永久保存のファイルに綴込んでしまったのでは、連中も物足りないと思えて、転居先の所轄調査局に書類を転送するんですよ。だから、昼飯が食いたくなると、連中は、軽い気持で、会社の人事課を訪問したくなるんですな、中には勿体をつけて、車代をもらって帰る連中までいるというのですが、札をつけられたこちらはたまりません。忽ちクビです。履歴詐称といえ、いや応なしですからね。しかし、人事担当の三浦常務は、僕をクビにはしませんでした。何しろ太田前会長子飼いの直系ですから、前会長のコネで入社した僕のクビを切る勇気もてなかったんでしょね。僕の方から退職願を出すようにと、頭をひねって、四国、中国、九州地方の小売店を調査しろという特別命令を出しました。全部の調査を終るまでは会社に帰ってくるなというのですから前代未聞です。むろん、単独行です。たった一人で、山間僻地の化粧品店を一軒々々、しらみ潰しに廻ってクイーン化粧品の売れ行きなり苦情なりを訊ねて廻るというのですから、誰だって、これでは辞表を出したくなります。その間、昇給はむろんのこと、予算一つない調査で

すから、旅費は立寄先の郵便局に毎月の月給と手当が届くまでの間は本人の立替払いです。一日にバスが何往復しかない四国の山の中や、海が荒れるといつ船便があるかも分らないような離島にまで、僕は、靴底をすり減らして廻りました。いく度、ここから辞表を郵送して、やめてやろうと考えたかしれません。半年もたつと、上衣の内ポケットにしまっていた退職願の封筒がすり切れて、中の辞表が汗でくちゃくちゃになってきました」

中瀬慎一の浅黒く陽灼けた顔に、ある陰翳が浮び上ってきた。遠くをすかし見るように、彼は、眼をすがめた。

あの時以来、俺は、ひとりごとを呟く習癖を身につけてしまった。誰一人知己のない田舎道の乗合バスに揺られながら、あたりをとじこめる訛りの多い方言を、まるで異邦人のように耳にしながら、俺は、いつか、ひとり言をつぶやくようになった。山陰の海に向って、俺は、靴先を濡れた砂にめりこませながら、退いて行く海潮に向って、バカヤロウと、いくたびも、咽喉の痛くなるまで、叫びつづけた。